

清水正之著

『国学の他者像——誠実と虚偽』

(ベリかん社・二〇〇五年)

遠山 敦

『国学の他者像』——本書のこのタイトルそのものには、あるいは奇異の感を抱く向きもあるかもしれない。「国学」と「他者」、両者はおよそ互いに相容れない関係にあるのではないか、そもそも「国学」に、「自己」とって見通しのきかない「他者」、互いの間に疎隔や齟齬を拭いがたく意識しつつ、架橋しがたい自他の間に関係を築くべく絶え間ない努力が求められる存在としての「他者」に関する問いなど存在するのか。

こうした奇異の感の背景には、国学に関するある通念が存在しているといえよう。著者が指摘するように、国学は、殊に戦後において「過去の日本の遺制として日本的なもの、典型とみなされ」、「ナシヨナリズム批判の思想的拠点」として、また近年では「脱構築、あるいは国民国家批判というあらたな視点を加え」、批判的観点から扱われる主要な対象と見なされてきた。そしてそれらの批判は、国学が「日本」という「幻想の共同性

をたて、個を共同性に回収するもの」である点に向けられていたといえよう。つまりそうした批判の拠つてたつ国学の原イメージは、「同質性を過度に強調し、他者と自己との差異を隠蔽する思想」であるとともに、他方では「異文化としての他者には、偏見に満ちたまなざしを向け、そうした他者の存在を正当に認識する視点に欠ける思想」というものであるだろう。こうした通念に基づく限り、国学において他者の問題、すなわち自己とは異質なものとして他者を前提し、互いに異質な自己がいかにして関係(たとえば共感や同情)を築き共生しうるかという問題は、そもそも発生の基盤さえもたないということになる。

これに対して著者は、「およそ国学ほど『日本の心』というような捉え方になじまないものはない」という。著者によれば国学は、その思想の根底に差異に対する極めて敏感な感性があり、それが「自他の差異、あるいは古と今との差異」への注目として顕在化するのだとされる。つまり、国学にとつて他者問題は、国学が内包する諸問題の一つという位置に止まらず、その基本的性格を決定する最も基底的な問いであり、他者をいかに把握するかが個々の国学者における思想の内実や方法意識と密接に結びつき、それを規定しているのだとされるのである。もとよりそこで問われる「他者」は、たとえば本居宣長の「漢意」批判で問われるような中国を代表とする「異文化としての他者」をもその内実として含む。だがより根底的なものとして本書で著者

が問おうとするのは、共同体において生活を共にしそこで日々触れあつて生きている「自己と対面的に存在する他者」であり、そうした他者との自己関係、さらには「自己が他者と共にある公共的空間」の問題である（「異文化としての他者」は「論理的には次の問題」であると位置づけられる）。人は他者と共に生きるが、自他は容易に通底しえない。なぜならそこには、関係に容易には顕在化しない自他それぞれの自己意識の内奥が、互いにとつて見通しがきかない（「私秘性」）が伏在するからだ。それは時に「他者からの剝離、共同性への背馳」という方向をもつた退つ引きならぬ激情として懐胎され、自他関係を一触即発の危機へと陥らせる可能性をも孕む。著者によれば、国学はそうした自他の差異を「虚偽^{いじか}」として意識したのであり、ここに国学の主要なテーマである「歌」の問題が問われることになつたとされる。他者との差異としてある、他者からは見通しのきかない（「私秘」）としての内なる心は、自他の関係の中に形あるものとして表現された「歌」の言葉とどのような関係にあるのか、歌は容易に通底し得ない自他の関係にどのような機能を果たし、何をもたらすのか。このように本書は、国学の基底的な問いを他者問題、すなわちその（「私秘性」）ゆえに他者との間に差異（虚偽）を抱え込まざるを得ない存在にとつて自他関係とはどのようなものであり、さらにはそこではどのような自他の「公共的空間」が構想されようとしたかを、主として個々の国学者の歌論を手がかりとして、倫理思想史の立場から探究しようとする

る試みである。

二

本書は全体で九章からなるが、その一部は既に発表された論考をもとに新たに構成し直されたものであるという。巻末の「関連論文初出一覧」によれば、最も早く書かれたものは一九八〇年に遡る。本書の構想が、長い時間を経て著者の中で慎重に育まれてきたものであることを示しているといえよう。思想的な記述は第一章から第八章までであり、五名の国学者が主観的にとりあげられている。以下、各章の表題と、その概要を見ておこう。

- 1 戸田茂睡 儀礼とその根柢——「夫婦婚禮」と「恋」
- 2 契沖 差異をめぐる方法——「差別」と「平等」
- 3 賀茂真淵 共同体とその組成——「異なる心」の情景
- 4 本居宣長(一) 他者という現象——自己意識のゆくえと「偽り」
- 5 本居宣長(二) 言葉と世界をめぐる方法——「我とかいふ禍神」
- 6 真淵・宣長そして御杖へ——心と超越の構造
- 7 富士谷御杖(一) 関係の基底——「人と人との間のこと」と「儒仏の後学」
- 8 富士谷御杖(二) 差異から「あはひ」へ——「恋の歌は道の正当なり」

まず第一章の戸田茂睡について、その問いかけは、仏や神といった超越に根拠づけられた中世的な世界像の喪失と、それに起因する「既存の思想によれない寄る辺なさ」を背景として、日常的な制度道德や様々な規矩の根拠に向けられていたとされる。それは例えば「嘉礼」や死の儀礼が、かつての宗教的意味を剥落させ、単に「心をあらため」「身をつつしむ」世俗内道德（「作法」）として把握されるといった事態や、あるいは伝統的堂上歌学が強い禁制への懷疑、歌作における俗語使用の容認といった事態として現れる。そしてそうした制度・習俗への関心は、他方で制度の規矩に収まらずそれを逸脱していく「人情」としての「恋」へと向けられていくのだとされる。「しのお事なくば夫婦婚礼なり、恋とは云べからず」とは、「夫婦婚礼」という制度習俗の矩を逸脱する、いわば道德の外部にある〈私秘〉としての「恋」の発見であり、そこに示された「恋の情と通常道德に支えられた制度との〈あわい〉、あるいはさげめにこそ、国学の思想といわれるものの重要な論点」が胚胎するとされるのである。

一方、第二章で扱われる契沖にあつては、他者は「第一義的には異なる文化」であつたとされる。契沖にとつて問題だったのは、「天竺」や「もろこし」にも共通する、歌や言語そのものの本質の普遍性（「平等」と、異なる文化におけるその異な

るあらわれ（「差別」）であり、それらに対する一種の〈比較文化的視点〉を通じて明らかにされる、事柄の「根源」であつた（普遍性を土台とした差異に着目し、また差異を通じてより鮮明に表出される普遍という構造をとらえること）。ここでは、本書で主題的に探究される「対面的な他者」の問題は前景から退いている。だが、たとえばそうした視点から明らかにされる、人の心（まごころ（真心））と表現された歌（まこと（真言））との関係に対する洞察は、「のちの「まこと」と「いつはり」をめぐる国学的議論の発端」を形作つたとされる。

次の賀茂真淵をめぐる第三章に至り、本書のテーマである〈私秘〉を抱える他者の問題はより前面に現れることとなる。真淵によれば、人は各自「こころにしぬばぬおもひ」を抱き、その限りで「同じきに似て異なる心」をもつ存在と捉えられた。だがそうした多様な心情（時に天皇への反逆心ともなりうる）を抱いた「異なる」人は、いかにして「教へねども」「ことゆく」古代的自然性に生きることができるのか。ここに真淵における歌の位置があるとされる。歌のカタルシスは、多様な情を「一つこゝろ」「直さへ」と収斂させ、「私」の争いには「やはらぎ」がもたらされる。真淵の理想とする「ますらを」のあり方を、著者は「己が心」と「一つこゝろ」との間にある〈落差〉を意識しつつ歴史、人倫、自然の連関の中に組みこまれていくという「一見ニヒルな生き様」だと捉えている。

続く宣長を論じた第四・第五章、さらには中間的総括ともい

える第六章を挟んで富士谷御杖を対象とした第七・第八章が、分量的にも本書の中心をなすものだといえよう。

第四章はまず、『あしわけをぶね』冒頭部分の、屈折に満ちた「実情」概念に対する精緻な分析から始まる。ここでその詳細を辿ることは到底できないが、「実ノ心」と「ヨクヨム」心とをめぐぐる歌詠む人の意識の分裂が、「偽リ」をめぐぐる問題を導きだす事情が明らかにされる。すなわち宣長によれば、人は「自己の自己性」素朴な「実ノ心」「アリノマ、」に立っている限り、他者との共感の世界（＝「風雅」）は開かれず、「開かれるには『今』の代」の人間は「偽リ」を通じてしかありえない。著者はそこに、「アリノマ、」の直接性と、「アリノマ、」への呵責として作用する統制的意識」という引き裂かれた自己意識をみる。だが一方『あしわけをぶね』では、後に、「ものあはれ」へと展開する「アリティノ人情」という理解が（そうした自己意識に関わらない）徹底した他者理解として登場するとし、以後の宣長の思索の歩みを「内省的心性論」なおこもっていた道徳的〈呵責〉の影を、払拭することで、まさに心のありていを内省的に問う立場から、他者理解としての人間理解（アリティノ人情）を組み立てて行くプロセスと捉え、『玉勝間』を対象とした第五章において、そうしたプロセスの果てに、「自己」と他者とを超越するあり方の示された場、「実の物」と「我」とが隔てなく一致する場」として、宣長において「いにしへの道」が発見されたと論じられる。

最後に扱われるのは、富士谷御杖である。第七章は『百人一首燈』等の初期歌論、第八章は『真言弁』を対象として論じられるが、注目すべきは御杖にあつて、「心の内の『実』なるもの表現が歌である」とする宣長までの一貫した観点に変化がみられる点である。御杖にとつて世界は「欲動（欲情）を所有する個の集合体」であり、誰もが「きたなげ」な私秘（「所欲」を抱いて生きている。だが同時に人はそうした心の「私」に対して、「公」としての身を生きているのであり、御杖によれば、人がその「所欲」を昂じさせ、それをあくまで目的合理的に追求し行為すれば、必ず他者との間に深刻な軋轢を生じさせ身を過る（「時宜をやぶる」）ことになる。ここに「真言」としての歌は、「所欲」の行為への発動を抑えて「時宜」を全うさせるのみならず、その「言霊」の「感」の作用によって人を、さらには神を共感させることによって「所欲」をもまた全うさせるものであるとされる。このように、御杖にあつて歌はまさに〈私秘〉を抱くものとしての「人と人との間のこと」として把握されたが、著者はさらに、そうした御杖の思索の足取りは、次第に「関係の相対性そのもの」を対象としうる位置へと御杖を達せしめ、そのことの中に「主観から客体世界の認識への方法的広がり」を獲得させるに至ったという。

三

以上が第八章までの思想史的考察の概要である。それはまさ

に、「国学を「歌学」と称される領域を中心に他者論として読み解く」ものであったといえよう。

しかし本書は、こうした考察を終えた後、さらに終章として「誠実と虚偽——日本倫理思想史の視点から」をおく。著者はこの章の位置づけを次のように語っている。

……国学が提起した問題を、近現代の倫理学・哲学がどのように受け止めてきたかを概観して結論にかえたい。それは国学に近代の萌芽をみるといった立場や、また現代の視点で国学を批評するというものでもなく、倫理思想史の流れの中での、国学が提起した問題のおよぶ範囲、またそれらの問題がどのような思想的交響のなかにあるのかの一端を示し、思想的考察の一助としておきたいからである。

すでにみたように、国学を他者論という観点から捉えようとする本書の試みは、「近代主義的な国学への視線からはなかなかすくいとれない、国学思想の一到達点」に新たな光を当てたものであり、国学の内在的な理解に大きく寄与するものである。だが本書における著者の目論見は、さらにそうした限定を超えて、日本の倫理思想史全体の理解の中に国学の提起した問題の正当な位置づけを求めるといえる。それが端的に窺えるのが、「誠実の伝統の中で——関係性再考」と題された終章第一節である。筆者はそこで、「日本の倫理思想の中に持続して流れるものとして「誠実」をもって基軸とみる見方がある」とし、その代表として『日本倫理思想史』において展開

された和辻哲郎の「清明心」（清明心—正直—誠）の倫理を挙げるとともに、それとある意味で対極にあるものとして、本書で明らかにされた国学の思想史を「自他の差異に力点を置き、差異をもって虚偽とみなすという意識」に基づいた「虚偽をめぐる思想史」であると捉えるのである。そしてそのことは、和辻にあつて「清明心」の倫理が、「倫理学」の体系の中で「信頼と真実」として倫理一般の問題（「人間存在の根本理法」として基礎づけられたように、本書の提起する、互いに見通しえない〈私秘〉を抱えて対峙する対面的自他の関係に対し、倫理的な考察を要求することになるだろう。その意味で本書は、今日の倫理的課題に対する、国学的な問いかけからの照射という意味をも併せものであるといえるのではないだろうか。宣長をめぐる著者の次の発言は、そうした本書の性格に関わるものだとはいえるだろう。

現代の日本には、実は一つの合意があるべきだとする神話
がすでに崩壊しており、抑圧の記憶のみが残っているとい
えるのではないだろうか。わたしたちのまえに、自由で主
体的な個人から成り立つ社会の形成にむけてしか、日本社
会の変革にしか閉鎖を破る道はないとみたとしても、しか
しそれは西欧流の個人主義なのかどうか。私は、宣長のテ
キストは〈他者の目の抑圧〉〈集団主義的社会〉の抑圧の中
にあつて、その抑圧を逆手に取りながら〈自己表現〉を
果たすものと読めると考えている。

最後になるが、本書は国学の他者問題が、専ら歌論の範囲に限定して論じられており、国学のもう一つの主要な論点である古道論については、主題化されて論じられることがほとんどない。「あとがき」には、著者自身そのことに言及し次のように述べている。

私秘の心が、共感・同感に転化するその一瞬、そこに立ち現れる他者との〈公共的空間〉を、人間と世界のあり方のなかに、位置づけ客観化するたしかな根拠を求めることが、歌論とは別に、古道論、あるいは神話解釈という国学のもう一つの重要なジャンルを生むことにつながり、歌論と神話論をむすぶ結節点となる、というのが私の見通しである。神話解釈のことは国学研究の次の課題である。

古道論、神話解釈を主題とした著者による統編が強く待ち望まれる。

(三重大学教授)

関口すみ子著

『御一新とジェンダー』

——萩生徂徠から教育勅語まで』

(東京大学出版会・二〇〇五年)

アン・ウォルソール著(菅原和子・田崎公司・高橋彩訳)

『たをやめと明治維新』

——松尾多勢子の反伝記的生涯』

(ベリかん社・二〇〇五年)

澤井 啓 一

いまさらジェンダーでもないだろうという意見もあるかもしれない。ジェンダーという用語が日本に紹介されてから、すでに三十年近い時間が経過しているし、歴史学や文学などの領域では日本人の研究者によって多くの研究成果も発表されているからである。くわえて最近では、ジェンダー・バランスを要求する社会的活動に対して「ジェンダー・バッシング」なる現象も起きている。その意味では、ジェンダーという方法的枠組み